



## 【樺太プロジェクト】

# 今を生きる学生が樺太の”今”を知り、何を思うのか。

稚内北星学園大学 非常勤講師 牧野 竜二

### プロジェクト概要

現在、日本最北端である稚内市宗谷岬。しかし、今から70年前、日本の最北端はそこではなかった。宗谷岬から望むことのできる「ロシア連邦サハリン州」の島影を見て、そこが「樺太」という日本の一部であったことを知っている若者はどのぐらいいるだろうか。そして若者だけでなく、我が国の終戦日である1945年8月15日の後も、樺太が戦火にまみれ、多くの悲劇が起きたと理解している方々は、どのぐらいいるだろうか。

2014年開講された映像メディア論及び演習（I&II）では、その悲劇の歴史を知る事で、樺太と切り離せない歴史を歩む稚内市の文化・歴史を再認識し、地域の将来を考えるきっかけとするため、学生による4名の樺太からの引揚者への取材を行った。

そして本年度（2015年）、学生は樺太へ、現在のサハリンの地へ渡る。その模様とこのプロジェクトの経過をレポートする。

### 【2014年】道内に住む、樺太引揚者への取材

学生たちはサハリンが樺太であった事を、聞いた事がある（ような気がする）程度の理解はしていた。しかし、稚内以外の出身者である学生においては、樺太という言葉すら聞いた事がない学生もいるのが現実である。そこで学生たちは、まず樺太への知識を高めるため冬季閉館中であった北方記念館へ出向き、急遽開館していただき、稚内市教育委員会の学芸員である齋藤譲一氏のもと、詳しい説明を受けることにした。その後、実際に当時の樺太の証言を聞くため、幼少期に稚内に引き揚げた小林侃四郎氏（元稚内市議会議長）に話を聞く。小林氏から終戦時の混乱を伝えられた学生は、引揚者の詳しい話を聞きたいと感じ、それぞれ家族に樺太出身者の知り合いがないか確認したところ、一人の学生の祖母が樺太出身者であることを知る。さらに市役所へ出向き、終戦時、樺太庁真岡町でソ連（現在のロシア連邦）からの襲撃を受け、ソ連兵から純潔を守るため自決をした真岡郵便局の電話交換手（九人の乙女）の元同僚、そして同級生を紹介してもらう。小林氏を含め、合計4名の証言を記録した学生は、樺太、現在のサハリンへ足を運ぶことを決意する。



小林氏に話を聞く学生



学生の目の前にはサハリン

### 【2015年】樺太の今を知るため、サハリンへ

樺太引揚者の故郷訪問を支援しているNPO法人北海道日本ロシア協会の協力の元、学生を代表して2名の学生がサハリンへ渡った。そのうちの一人は、樺太出身である祖母を持つ学生である。稚内市から5時間半の船旅、1時間の入国審査ののち、学生はサハリンへ足を踏み入れる。学生は、サハリンに残る樺太を探し、旧国境の境界標石や現在も使用されている樺太時代の建造物などを探したり、証言を得た真岡町（現在のホルムスク市）へ足を運び、悲劇の起こった真岡郵便局跡地や、ソ連の襲撃時に真岡に住んでいた方々が逃避行をしたであろう山道を、実際の目で見てまわった。また、学生はサハリン州の中でも最も大きな市であるユジノサハリンスク市のホテルである男性（90歳）と知り合った。そして男性が樺太出身者であり、70年後の今、初めて故郷の地を訪れたと知った。学生は男性に同行し、市内に残る当時の記憶を探ることにした。男性は当初、自らの故郷を奪ったソ連に対し、悔しい思いをしていると語った。しかし、現在の発展した街並みを見たり、樺太の名残を感じたり、日本人墓地への参拝を行うことで、次第にその心境が変化していったことを学生は感じた。最後に話を聞いた時、男性は「今、ここに住む人々はこの土地を綺麗に使ってくれている。自分が住んでいた頃より、発展した町を見ることができただけで満足している。」と語った。

旅の最後、学生は祖母の故郷、大泊町（現在のコルサコフ市）に赴き、祖母が最も思い出深いと言った女学校の跡地を探ることにした。しかし、祖母が語った当時の記憶だけが頼りの学生たち。そこで同年代の現地通訳の協力の元、コルサコフの市民に聞き取りを行った。そのすべての住民が、言葉は分からないが真剣な顔で話を聞き、そして助言してくれた。紹介してくれたのは、町の中でも一番古い学校跡地だった。そこは、本当に祖母が通った女学校跡地なのか確認はない。しかし、祖母が語ったように、確かに、海の見える高台にあった。



引揚者の男性と樺太の名残を探す

### 【終わりに】樺太の今を知った学生は何を思うか

樺太の”今”を知った学生は、その高台で、次のように思いを巡らす。

「ここには戦争という悲劇がある。けれど、不謹慎な言葉かもしれないが、その悲劇があったからこそ、今、この町がある。この後、いい方向に行くか、悪い方向に行くかわからないけれど、いい方向へ向かうために、私たちは戦争があったことを、忘れてはいけないと思う。」

今回の一連の学生における樺太取材は、すべてムービーカメラで記録をしている。現在、その記録した映像を編集し、ドキュメンタリーとして制作中である。



祖母が暮らした町の高台で